

保育者の資質向上へ向けた リカレント・モデル・カリキュラムの開発

研究代表者 徳岡博巳

はじめに

本研究は、短期大学部幼児教育保育科を卒業して幼稚園教諭・保育士（以下、「保育者」）として働いている人たちに対するリカレント教育のあり方を検討し、保育者の資質向上へ向けたリカレント・モデル・カリキュラムの開発を目的とするものである。

現在、幼稚園や保育所においては、多様な発達課題を有する子どもたちへの対応や保護者支援、地域の子育て支援など、果たすべき役割や課題がより複雑になってきている。当然のことながら、そこに働く保育者にそれらの課題の達成が求められており、より専門的な知識や技術が必要となってきた。

一方で、養成校に通う学生について考えてみると、「ゆとり教育」の影響か、養成校とその定員の増加が原因か、入学する学生の基礎学力の低下や社会性の欠如といった指摘が聞こえてくる。また、対人的なコミュニケーション能力の乏しい学生も少数ながら存在しているという現状である。

入学する学生の質力の低下と出口である保育現場のハードルの高さといった二重のギャップが保育者養成にはある。そこで従来の保育者養成における教育内容や方法に改革が求められているのである。そのためには、養成期間の延長や、単なる新しい情報の伝達といった表面的なカリキュラムの操作だけでは限界があり、新たな〈より広義の意味での保育者養成〉の考えを導入する必要があるだろう。

同時に、新人保育者にとってこのような現場に入っていくことはハードルが高く、その後も困難さを抱え続けていることが見て取れる。卒業生が現場に出て一人前の保育者として成長するまでをフォローアップすることは、保育者養成を担う大学としての責務であると考ええる。

本研究では、2年間の保育者養成課程を完成教育としてではなく準備教育と捉えている。つまり、卒業後も日々の幼児教育・保育活動の中で自分自身をふりかえり、成長し続ける保育者の養成をイメージしているのである。養成校での学びから現場を経て、また養成校へと循環する中で、現在の幼児教育・保育現場の困難な課題への対応に必要な専門性を獲得していく力を身に付けた保育者であり、それをフォローするリカレントのあり様や養成方法を解明したいと考えている。

なお、本研究は徳岡博巳（研究代表：幼児教育保育科）、藤本芳則（幼児教育保育科）、山内清郎（教育心理学科）、西村美紀（幼児教育保育科）、亀田十未代（幼児教育保育科）、中田千穂（幼児教育保育科）の6名の共同研究であり、打ち合わせ及び研究検討会を7回（2011/12/22、2012/1/25、5/2、5/23、6/27、9/26、2013/1/31）行なった。

1. 本研究の構成

まず最初に、本研究の取り上げるリカレントについての枠組み、定義付けを行なうため、6名のメンバーによりフリー討論をした。何故、今リカレントが必要なのか、どういう内容のリカレントであるべきか、教育・保育現場の状況や卒業生の実態、現在養成校で学ぶ学生の状況等が話し合われた（4回：2011/12/22、2012/1/25、5/2、5/23）。また、2008年から2009年にかけて全国保育士養成協議会専門委員会が実施した「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査」のデータをもとに卒業生の動向を考察した。それらにより得られた結果より、本研究で取り上げようとする「リカレント」の定義付けを徳岡が行なった。

次に、卒業後の保育者の資質向上に向けたカリキュラムを検討するにあたり、本学の養成課程在学中に、どのような事を学び、教育・保育現場へと出ていくのかについて、主に実習の事前事後指導で行なっているアンケート調査をもとに、その実態把握を中田が行なった。具体的には、2012年度大谷大学短期大学部幼児教育保育科2回生81名（男性13名、女性68名）を対象に、2011年2月～2012年10月の間に行なわれた実習の事前事後指導の授業内（計5回）にアンケートを実施した。アンケート内容は主に、以下のような内容で構成されている。

①回答者の性別や進路希望等を含めたフェイスシート

- ②実習に向けた事前学習の理解度（5段階評価）
- ③事前学習の総合的な達成度（100点満点で自己採点）
- ④実習中の、実習園からの指導内容（5段階評価）
- ⑤実習後の園や子どもとの関わりに対する理解度（5段階評価）
- ⑥実習後の総合的な達成度（100点満点で自己採点）
- ⑦実習を終えて嬉しかったことや困ったこと、勉強になったこと

なお、②および⑤については、「よくできた」を5、「できなかった」を1とする5段階評価、⑦については自由記述による回答を求めた。

保育者の養成課程は、専門職能教育課程である。所管省庁に認可を受けるために学校が用意する教育課程は、専門性を培うための科目によって構成されている。その科目群を見ると、保育者養成においては、たいへん多様な学問分野を要することがわかる。そのような多くの専門分野にまたがった学習経験を、学生一人ひとりの内側で、保育という一つの統合された専門性へと構造化されていくよう援助するのが、養成課程のあり方であろう。さらに、「保育」は単なる学問分野を超えて、より価値観、世界観、文化といった生活や生き方の側面をも含んだ実践である。こうしたことから、西村は保育者の専門性の向上を目指したりカレント教育のあり方を探るために、まず保育者の「専門性」とはいかなるものか、先行研究をもとに、分析・整理することによってまとめた。

保育者は、経験を積むことで、保育の専門家となる。経験を積むというのは、現実の子どもたちに対応する保育技術の向上とともに、保育に対する考え方、つまり保育観の輪郭が明確になっていくことである。とするなら、保育者のためのリカレント教育は、これら保育技術や保育観を向上させることが大きな目的となる。それには、新しい知識を提供するだけでは不十分であり、保育者が、みずからの保育を点検し評価する視点が必要である。こうした視点に立って、藤本は保育者の技術面での専門性、特に「絵本の読み聞かせ」を具体例としてとりあげ、保育者として子どもたちと向き合う前と後で、どのような違いがみられるかを比較することで、どのような点に留意してリカレント教育を構想すべきかを考察した。

また、亀田は「反省的实践家」あるいは「成長し続ける保育者」像を目指す上で、今後のリカレント教育のあり方、および具体的な教育内容・教育形態はどうあるべきか、その手がかりとなるものを探った。本研究では、幼児教育保

育科の卒業生で、現在も保育の現場で働いている人（4年経験11名、2年経験7名）を対象に「保育者の専門性（保育力）について」のアンケート調査およびヒアリング調査を通して、現場の保育者のニーズを探り、リカレント教育に求められている教育内容や取り組み形態等をより明確化させる試みを行なった。同時に、完成された保育者像として現役を定年退職され、現在は大学教員をされている元保育士からもヒアリングを行ない「自ら学び続ける力」を育むために何が必要かを考察した。

本研究では、最終的には「保育者のリカレント教育カリキュラム」において、すぐに実際に使用できる教材の開発を目指しているが、山内は、その前段階としてリカレントにおいて効果的に機能する教材テキストを開発するために、

- ①リカレント教育と保育者養成教育との違い
- ②講義や演習で使用される教科書とは異なる性質をもったリカレント教育教材の特徴
- ③テキストを有効に機能するためのファシリテーション技法

の3点について考察を行なった。

2. 本研究の概要

（1）本研究で取り上げる「リカレント」とは

保育者養成あるいは保育現場の状況を見てみると、以下の特徴がうかがえる。

①養成校の数及びその入学定員の増加

平成5年と20年を比較してみると養成校は9倍、入学定員は3万人から5万5千人へと増加している。

②学生の質の変化

従来であれば、保育者になりたいという人たちが、それなりの努力をして入学してきており、学びの姿勢が備わっていたといえるが、最近ではなんとなく選択したという学生も少数ではあるがいる。また、少子化の影響が社会体験や生活経験の乏しい学生が増えてきている。

③保育者として求められる専門性

虐待や特別な支援が必要なケースの増加により、以前の「子育てのプロ」から「ソーシャルワーク」や「カウンセリング」などの領域までが求められるようになった。

一方で養成校を卒業した人たちの状況を見てみると、以下のことが伺える。

i) プラス要素とマイナス要素が混在している職場

保育者としての現場は、大いにやりがいを感じることができる。と同時に、辞めたいくなるような辛いことや空しいことも、たくさんある職場と言えるであろう。

ii) 卒後2年目の実態

保育職に就労したごく初期の段階でやりがい感が持ちにくく、躓いたり、悩んだりしている姿がみえる。不安や迷いから不本意な離職につながるケースも多く見られる。

iii) 研修意欲が高く、良い人間関係を求めている

全体的に人間関係や働きやすさは共通して求めており、研修への意識も高く持っていることから、良い職場環境、就労に必要な質の高い研修が用意されることが重要と考える。

iv) 卒業後1年と3年くらいが退職するポイント

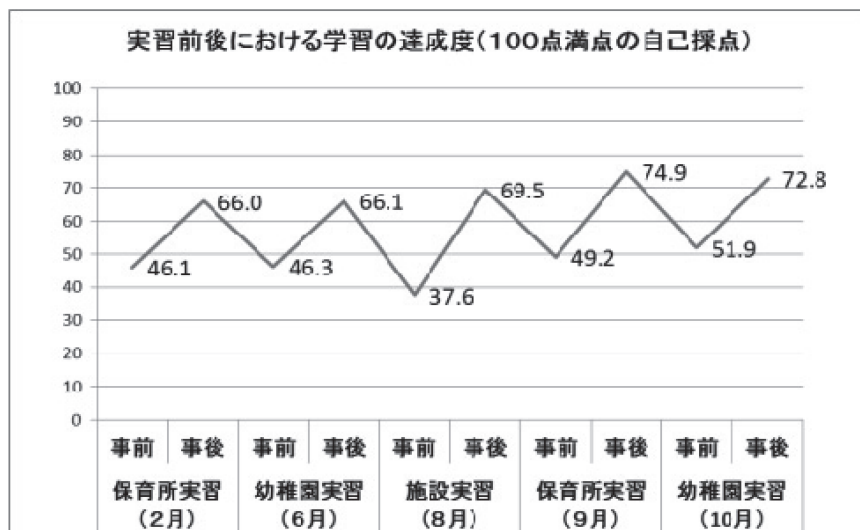
退職理由は、2年目では「人間関係」「心身不調」が多く、6年目・11年目の卒業生では「結婚」「出産」が多い。

以上の観点から、本研究ではリカレントを学校から職場へ、学生から保育者への移行の時期にある2～3年目の卒業生を対象にし、知識・技術の学び直しと同時に人間関係を円滑に継続、発展、或いは拡大できるコミュニケーション力の養成の場の提供と考える必要があろう（徳岡博巳）。

（2）養成課程在学中の学び—実習に着目して—

実習に対する自己評価を見ると、実習前は「合格ラインに達していない」と評価していると考えられる。しかし、実習後の自己評価はいずれも60点を越え、「なんとか合格」という評価をしていることがわかった。そして、実習後の自己評価は計5回の実習を重ねる中で徐々に上がっており、実習を何度も重ねることによって少しずつ自信をつけていく様子がうかがえる。

5段階評価による、実習での学びを詳しく調査すると、「よくできた」「大体できた」を合わせて80%以上となった項目は、「園での1日の生活・仕事の流れの理解」、「仕事内容の理解」、「子どもの発達やコミュニケーションのとり方の理解」といったものがあげられる。反対に、「あまりできていない」「できて



いない」の回答数が多かった項目は、「ケガや病気などを含む緊急時の対応の理解」、「保護者との関わり方の経験」、「他機関との連携の理解」といったものであった。

さらに、「今回の実習で勉強になったこと」に対する自由記述での回答に目を向けてみると、まず、初めての实習で回答が多かったのが、「保育者の仕事が終わった」や、「子どもの発達を知ることができた」という内容である。これらは実習を一度経験すると把握することができるものだともいえるが、実習を重ねるごとに、保育者の仕事でも事前準備やクラス運営、保護者対応など、更に細かな部分に視点が移っていくことがわかった。

一方で、すべての実習を通して回答が多かったのは「子どもに対する言葉かけ」や「子どもとの関わり方」である。それはつまり、それぞれの実習は2週間と短いものではあるが、何度実習を重ねても新しく学ぶことが多かった部分だといえ、学生(実習生)が子どもと関わる保育者の姿を見て学び続けている部分だと考えられる。また、実習を重ねるにつれて、「絵本の読み方」のような具体的なスキルから、「自信と責任をもつ」というような保育に対する姿勢など、学生の学びは多様化していくことが読み取れた。

この調査を通して、実習に行くまで子どもとふれあう機会が全くない学生が4割を超える中、養成機関での計5回の実習を通して本当に基本的なところか

ら学び始め、卒業前にやっと保育という仕事の多様な部分に目が向き始め、そして保育現場に出ていくという流れが浮かび上がってきた。今回の調査結果を、リカレント教育の内容を考える一助としたい（中田千穂）。

（３）保育者の専門性に関する研究—「養成教育」と「現職教育」の連続性—
関連文献をすべて確認できたわけではないが、概ね以下のようなことがわかった。

- ①保育に関連する「知識」や「技術」は、実践の場で活かされてはじめて「保育者の専門性」となる。
- ②内容構成については、一般的な人間力（社会人基礎力）に関するものと、保育という場に求められる「知識」「技術」に関するものがある。前者は、それまでの生育歴や学校等での体験から培われてきたものであり、後者は保育士養成課程や幼稚園教諭の教職課程の中にみられる知識・技術体系を基礎としている。
- ③養成課程や教職課程においては、「実習」（保育実習・教育実習）という形で、上記②を現場における実践知へと結びつけようとしている（①へ向けての機会）。
- ④保育現場（保育所その他の児童福祉施設、幼稚園）においても、各種研修や自他の評価によって、保育の専門性向上へむけての取り組みが行なわれている。
上記①を実践するため、養成課程・教職課程における実習が用意されているが、それだけでは時間的にも、立場的にも不完全である。実践現場においていかに専門性が培われていくのかが鍵となる。この際、養成・教職課程を担う大学や短大、専門学校と現場が連携しながら、保育者の専門性の向上、ひいては保育の質の向上へむけて取り組む必要があるだろう。その二つのフェーズの「リレーゾーン」となる期間（着任初期）に何が求められるのか、現場のニーズとともに養成校教員の研究成果をふまえて考察し、リカレントなどの取り組みとその改善を継続的に行なう必要があるだろう。

最後に保育者の専門性に関する評価についてであるが、諸外国において数量的評価が行なわれているケースも多いようである。上記②のみについてはそのような評価も可能かもしれないが、①のように実践の場によって「専門性」の基準が変化するのが「保育者の専門性」の本質であるならば、評価についても

実際の場を中心としたものでなければならない。今後の課題である（西村美紀）。

（４）保育者のリカレント教育への一視点

日々の保育における技術的側面は、日常的であるがゆえに、保育者が改めて意識することは、ほとんどないと思われる。保育技術は、いつの間にか身につけているのである。このことは、日常的な保育行為は無意識的に行なわれるため、その行為が当然のこととして認識され、改めて振り返る対象になりにくい、ということの意味する。どのようなことを無意識に獲得するのかをまず把握し、自らの評価対象とすることが必要となろう。本研究では、具体的な保育場面として「絵本の読み聞かせ」をとりあげ、保育者として子どもたちと向き合う前と後で、どのような違いがみられるかを比較することで、その手がかりを得ようと試みた。

具体的には、実習を経験した本学科学生に、読み聞かせに関して２度のアンケートを実施した。その結果をふまえて、〇幼稚園の協力のもと、幼稚園教諭６人にインタビューした。具体的には、６人を３人ずつ２グループにわけて語ってもらおうという方法をとった。一人ずつよりも、お互いに意見の相違がみられた場合、それぞれの理由なども聞きやすいというようなことも考慮してのことである。６人のうち、ひとりが教諭１年目であり、あとの５人には、ほぼ１０年以上経験のあるベテランである。

学生のもつ子どものイメージは、現実の子どもたちと接して得られたものではないので、当然のことながら、概念的である。一方、現場の保育者は、現実の子どもに即して保育をしている。現実の子どもに向き合うかどうかの違いは、子どもへの接し方、声のかけ方などに大きくあらわれる。読み聞かせでいえば、読むときの雰囲気づくりや読み方等々である。しかし、どちらの手で絵本を持つかとか、表紙をどのタイミングで見せるかなどのように、直接子どもとかかわらないようなところは、学生との大きな違いは見られなかった。保育者の行為や行動は、深い知見に基づくというわけではなく、絵本というメディアの特性をふまえた読み方への了解も必ずしも十分ではないようである。ここからリカレント教育では、まず専門的知識が、保育の質の向上に不可欠との認識を実感することが必要と思われる。その過程で、自らが振り返る対象としにくかったルーチンワークを評価するという可能性がひらけてくるのではないか。読み

聞かせでいえば、一見些末と思えるような技術的側面も、絵本の読み聞かせの一部であり、それゆえに読み聞かせのもつ意味とかかわるという可能性を視野にに入れて考えるということである。そのさい、概念的に理解するだけではなく、現実の保育に反映できるよう、実感をもって、保育観をとらえなおすことが重要であり、そのための具体的方法として、適切な誘導による保育者相互の情報交換や討議なども有効かと思われる。

藤本担当の詳細は、本学幼児教育保育科の「研究紀要」14号（2013.3）に、「保育者のリカレント教育への一視点—絵本の「読み聞かせ」を手がかりとして—」として掲載（藤本芳則）。

（５）「成長し続ける」保育者であるために—現職保育者へのヒアリングから—アンケート調査およびヒアリング調査での主な質問項目と回答内容は次のようである。回答内容については、予想通り様々な内容が含まれており、とても一つにまとめられるものではないが、敢えて整理のため次のようにまとめた。

①目指している保育者像について

- 子どもに寄り添い、子どもの心を理解し、笑顔の似合う元気な保育者
- 一緒に遊び、子どもの意欲や笑顔を引き出し、子どもと共に成長できる保育者
- 子どもにも保護者にも信頼される保育者

②どんなことに悩んだか、立ち直るきっかけは何であったか、また保育者として続けられたエネルギーは？

- 保護者や職場での人間関係（9名） • 保育技術や保育力（8名）
- 自分の能力や人間性（4名） • 子どもとの関係（3名）

* 立ち直ったきっかけ&保育者として続けられたエネルギーは

- 子どもの笑顔や成長、そして信頼関係 • 保護者との和解や感謝の言葉
- 同僚、先輩、幼教の友人に悩みを話したり、共感してもらったこと

③保育者としてもっと力をつけたいこと（保育者の専門性）は何か

- 一人ひとりを理解するための知識（健康や発達、障害児保育等々）
- 子どもがワクワク出来るような遊びや生活を創り出す力（想像力、創造力、保育技術と感性、チャレンジ精神等）
- 目的に向かって、仲間と力を合わせ達成できる力（計画力、実行力、判断力）

コミュニケーション力等)

以上の回答を振り返ってみると、保育者達がいかに子ども一人ひとりを大切にしながら、豊かで充実した保育を展開していきたいと考えているかがわかる。その目的のために保育者自身が上記(結果の③)にあげられたような豊かな人間力を求めていることがわかった。また、(結果の②)からは、学びたい意欲を継続させる力は、子ども、保護者、保育者同士、あるいはそれ以外の豊かな人間関係であることが伺える。

このことから、リカレント教育は、保育者としての専門的知識を学んだり、豊かな人間性を育む機会を“継続的に”持つことが求められており、またそれをどのように学ぶかも重要になってくると考える。ヒアリングでは、講座形式の受身的な学び方だけではなく、自分達の実践を報告し、語り深めあい、人間力を高め合える研究会のような場を作れないかという案も出された。そこに養成校の教員が参加すれば、実践を深め理論化に結び付けるなど、共に豊かな保育を創造する場になることも考えられる。しかしながら、これは一つの案にすぎないので、具体的な方法等については、今後、チームとして研究を深めていきたいと考える(亀田十未代)。

(6) リカレント教育における教材開発に向けて

リカレント教育の教材開発について、本年度の予備研究での目的は次の通りである。

保育者のリカレント教育の教材開発で、長期的には本研究の全体構想における「保育者のリカレント教育カリキュラム」において、すぐに実際に使用できる教材の開発を目指している。だが差し当たり、実際に使用可能で、かつ、リカレントにおいて効果的に機能する教材テキストを開発するために、次の諸点をまず明らかにしなくてはならない。

- ①リカレント教育と保育者養成教育との違い
- ②講義や演習で使用される教科書とは異なる性質をもったリカレント教育教材の特徴
- ③テキストを有効に機能するためのファシリテーション技法

各点について説明していこう。①について、当然のことだがしかし深く留意しておかなくてはならない点は、リカレント教育の対象は保育現場で一定の実

実践経験を積んだ保育者だということである。本研究では保育者としての仕事を一定一人前としてこなせるようになっている就職後3～5年あたりの保育者をその対象として想定している。教育対象の保育者が既に実践経験をもっており、いわば保育世界に入るための準備教育は済ませている点はリカレント教育において強く認識することが大切である。

準備教育とは、具体的な保育技術面での「絵本を読むこと」「遊びを展開すること」「子どもとの間のコミュニケーションの特徴」等や、子ども理解の面での「発達の理論」「人間の社会性のあり方」「保育における保護者支援の意義」等を習得することである。他にも、保育者としての仕事を一定こなせるようになっている以上、理論的に十分に展開されないレベル、素朴なレベルであっても、いわば保育者の「身についている」ことは数多くある。

リカレント教育では、保育者養成教育、保育世界に入るための準備教育とは方向性の違った教育が展開されなくてはならない。準備教育が保育世界に「入る」ための教育であるとするれば、リカレント教育はその世界から「いったん出て」「別の角度から眺める」教育と言えるだろうか。就職後3～5年あたりというのは、一方で、ようやく保育現場になじみ仕事がこなせるようになり、周囲からも一人前として認められ仕事を任せられ信頼されるようになる時期である。と同時に他方で、保育者自身には、日々のルーチンを無難にこなすだけではなく自分独自の保育を組み立てていきたいという意欲が生れ始める。あるいは、それまで身につけてきたことで仕事をこなしてはいるが状況によっては自分のやり方が通用しないこともあるのに気づき始める時期でもある。保育者がリカレント教育の場に足を向ける際には、こうした「もう少しこれまで以上のことができるのではないか」「これまでのやり方だけではどうもうまくいかないことが出てきた」といった、ささやかだがなおざりに出来ない保育者自身の違和感や気づきがきっかけになることが多い。

そうすると②について、リカレント教育の教材開発ではいかなる教材テキストを準備しなくてはならないのか。これについては最近特に看護学の領域等で注目を集めているIBL (Inquiry Based Learning) の考え方が参考になる。看護学においては医師の養成教育と対比的に次のように言われる。医師であれば患者を診断・治療し、病の治癒をまず一義的目標にすればよい。それに対して看護師の対象とする世界はより複雑で一義的には決定しがたい。それはいわば患者

やその家族等の生活の質（Quality of Life: QOL）が対象である。日常的であり些細であり時にはその本意が隠されたままである患者や家族らの言動から、彼らの求めている QOL のあり方を個別の事例にしたがって個々の看護師が予測・発見していかななくてはならない。その点での探求（Inquiry）性が強く求められるのである。

この発見性を重視した教材テキストは、従来の養成教育でのテキストとは随分とイメージを異にする。教材テキストについては上述の IBL 等の理論、また、学生の実習記録、保育実践者の実践記録等から、作成がほぼ終了している。だがそれだけでは十分ではない。③に挙げたように、この種の個別状況的で発見的なテキストを活かすためには同時に、それを用いる授業場面でのファシリテーター（本研究では通常大学の教員がその役を担うことになる）の技法を整えておかななくてはならない。現時点で想定されるのは、グループによる集団討議や、開かれた授業展開のあり方等である。これら授業場面での準備が十分でないと、リカレント教育の重点である、準備教育と違った方向性——保育世界を「いったん出て」「別の角度から眺める」ことや個別状況における保育者自身の探求性・発見性——を発揮できなくなってしまう。既に教材テキストは準備できている。次年度は、これらのテキストを用い、本学の卒業生等を中心に実験的にリカレントの授業を実施し、その活動の中で、ファシリテーション技法の整理、教材テキストの精選に取り組む予定である（山内清郎）。

3. まとめ

近年は、「反省的实践家としての保育者」という概念を中心に、「仕事を続けながら、成長し続けること」、「組織の一員としての自覚を持つこと」という、専門職としての姿が模索されている。このことは、学校での養成教育は完成教育ではなく、仕事をしながら、同僚と協働を図りながら、成長していくという「成長し続ける保育者」の養成が必要であろう。卒業生が職業人になり、その職場での学びから成長をし続けるわけだが、いきなりそれができるわけではなく、移行期間のようなものがあるのではないかと。この時期に、学生から職業人への橋渡しをするサポートが求められているといえる。しかし、大学の独りよがりでは現場にとっては迷惑千万であり、現場と連携をとりながら、この移行期間における卒業生へのサポートのシステム（リカレント）が求められている

のではないだろうか。

本研究は、やっとスタートしたに過ぎず、今後保育者の養成に関わる様々な分野の教育者がそれぞれの専門領域におけるリカレントのあり方を持ち寄り、或いは保育現場と連携しながらシステムを構築していく必要があろう。

